

真宗文庫

---

おぼうさん  
僧侶 31 人の  
ぽけっと法話集



---

東本願寺出版



## はじめに

真宗大谷派では、一九五一年から二〇一五年まで、親鸞聖人しんらんしょうにんのお念仏の教えを伝えるラジオ『東本願寺の時間』を放送してきました。

真宗大谷派の僧侶による十分間のお話を毎週放送し、六十五年という長きにわたり、人びとに親しまれてきました。

本書は、そのラジオ放送の中から、毎日お念仏の教えにふれてほしいという願いのもと、三十一のお話を選出し、加筆・修正を加えて発行したものです。

本書が仏教、そして親鸞聖人のお念仏の教えにふれるきっかけとなり、そして、生涯にわたりお念仏を申して生きていく「人」が誕生する機縁となることを願っています。

東本願寺出版



もくじ

黒田 進	呼びかけを聞く……………	9
能邨 勇樹	悩むは大事……………	15
渡邊 学	お経は鏡……………	21
酒井 義一	もうひとつの物語……………	27
荒山 信	南無阿弥陀仏のいのち……………	33
鶴見美智子	生きる姿……………	39
片山 寛隆	仏さまのはたらきに遇う……………	45
寺本 温	「今」尊し……………	51
園村 義誠	供養するとは……………	57
四衛 亮	現代の眼の危うさ……………	63

藤井 理統	いのちの宿題	69
木ノ下秀俊	地獄の底	75
平原 晃宗	仏さまの大悲	81
二階堂行壽	真のよりどころを求めて	87
今泉 温資	遺産相続と仏法相続	93
渡邊 尚子	いのちとは何だろう？	99
伊奈 祐諦	本当に尊いこと	105
望月 慶子	救いとは	111
保々 眞量	人間の〈ものさし〉	117
楠 信生	呼びかける言葉	123
池田 徹	生きる 意欲	129
宮部 渡	死とはなにか	135

木戸 尚志	ご命日……………	141
本多 雅人	「問い」に生きる……………	147
五辻 文昭	生きる意味……………	153
高名 和丸	出遇わずにおれないのち……………	159
河野 通成	世を捨てないで、世を生き尽くす……………	165
藤井 善隆	悲しみからみえてくるもの……………	171
直林 真	闇と光……………	177
藤場 芳子	幻の子ども像……………	183
海 法龍	深い促し……………	189





呼びかけを聞く

黒田 進  
くろだ すずむ

(滋賀県 満立寺)  
まんりゅうじ

ある先生が、「ナムアマダブツというのは、お前それでいいのかという私への呼び声です」とおっしゃっていました。確かに、私たちは実に多くの呼び声を幼い時から今日まで聞いてきたのではないか、また、これからも聞き続けていくのではないかと思います。

「おはよう」「こんにちは」に始まって、「おやすみ」にいたるまで、また「こうしたらいいのではないか」「こんなことがあったよ」と、一日のうち、どれほど家族の中で、また隣近所などの交わりの中で呼びかけ合い、その声を聞いていることでしょうか。何でもないことのように過ごしているのですが、そういう中でいろいろ教えられ気づかされ育てられてきたのが私たちではないかと、この頃つくづく思うのです。

というのも、家にいる三歳の孫を見てそのように思ったのです。生まれてから、いや、生まれる前から、どれだけ呼びかけられ続けてきたこ

とか。名前を呼ばれ、いただきますをしようね、仏さまに手を合わせようねと、手取り足取り両親や私ども祖父母から繰り返し呼びかけられ教えられる……。そういう孫の姿を見てみると、ああ自分もこのように呼びかけられ育てられてきたんだなあ、あらためて感ずるのです。

人は実に、顔を洗うこと、服を着ることからすべて、何一つ教えられずにできるようになったことはないのだと気づかされます。それがいつの間にか、自分でできるようになったつもりで、あんなに教えられたことなどケロッと忘れてしまっているのです。「自分一人で大きくなったつもりで」と、昔母親に叱られたことが思い出されます。人は生まれおちてからのち終わるまで、呼びかけられ続け、教えられ続けていくものなのですが、そのことがまた素直に受け止められないのも事実です。

これはずいぶん前のことなのですが、あるお寺でお話をする機会があ

りました。その席で私は、人と生まれ、人として生きることについてお話する中で、お経に説かれる優曇華うどんげの話をしました。優曇華は靈瑞華れいずいけとも訳され、三千年に一度咲く花とされ、あい難いことの喩えたととして説かれます。人の身を受けることも、この三千年に一度咲く花のように、まことに出あい難いことなのだと言われるのです。そのことをとおして、私たちが父母からいただいたこのいのち、この身を本当に受け止めることの容易ならないことをお話したのでした。

そして終わりました。帰宅し、その夜のことでした。一人の女性から電話がありました。「今日お寺でお話を聞かせてもらった者です」ということでした。その方が言われるには、「三千年に一度咲くような出来事が、人と生まれるということなのだというお話を聞いて、亡き母親のことが思い出されたのです」と。「特に晩年、年老いた母親と一緒に暮らしてい

て、イライラすることが多く、とてもつらくあたり、そのことが思い出されてきました」としばらく沈黙されました。どうも受話器の向こうで涙ぐんでおられるようでした。私も何か身につまされて、じっと聞くしかありませんでした。

この女性は、日頃忘れていた母親の姿、自分を生み育ててくれたこと、そしてだんだん年老いて家事のことなど充分できなくなってきた、そういう母親を疎ましく思った。その自分の姿が慚愧の念とともに一挙に呼び起こされてきたのかもしれない。そしてそのことを誰かに話さずにはおれなかったのでしょう。

私たちは常に、亡き親をはじめ、現在只今も縁ある多くの人びとの呼びかけを受け続けているのでしょうか。しかしまた、その声がなかなか聞けないのも私たちの姿です。そういう私たちに聞く身になれと呼びかけ

てくる、いのちの声、ナムアミダブツのみょうごう名号であると教えられているのです。

# 悩むは大事

能邨のむら  
勇樹ゆうき  
(石川県勝光寺)

私自身、大学で仏教を学び始めてから二十六、七年経ちますが、最近つくづく思うことがあります。それは「悩む」ということはとても大事なことです。お前は一体何を学んできたのか」と自問自答する時、「悩むことは本当に大事なことであり、そのことを一つハッキリした」と言っても言い過ぎではないと思っています。

今から十五年ほど前のことですが、あるお家にご法事に行きました。十七回忌のご法事でした。亡くなられたのはそのお家の子どもさんで、当時高校生だった息子さんが事故で亡くなられたのです。ご法事の後にお母さんとお話をしたのですが、事故のことや今の気持ちを語ってくださいる中で、地元の新聞に連載されていた「一期一会」というコラムをたまたま目にした話をしてくださいました。執筆者は私どもと同じ宗派である真宗大谷派のM先生だったのですが、「読み終えたとたんに熱いもの



がこみ上げて、涙が出て止まらなかった」というのです。それからそのお母さんはそのコラムをスクラップにして、大事に大事にしているとのことでした。私はその姿を見て教えられたのですが、もし子どもさんを亡くすということがなければ、きっとM先生の言葉に出遇<sup>であ</sup>うということもなかったのではないかと……。つまり十数年間にわたり、現実が引き受けられなかった年月が、言葉に遇わせたのではないかと感じたのです。たとえ同じ日に同じ物を読んだとしても、子どもさんを亡くすということとがなければ決して出遇えなかったのではないか。お母さんの深い悲しみが言葉に遇わせたのだと思わせられたことです。

その後、お母さんにご縁のあったお寺で真宗のお話を聞き続けられたのではないでしょうか、二十五年のご法事にお参りをさせていただいた時には「息子の死は南無阿弥陀<sup>なむあみだぶつ</sup>仏に遇うためでした」と涙ながらにおつ

しゃっていました。今も大変印象に残っているのですが、その言葉は決して息子さんの死が悲しくなくなったというのではないのです。二十数年悩み苦しんできたことが「真実のいのちをたずねる歩みであった」「大切なことを知るご縁であった」というのでしょう。言い換えれば息子さんをご縁に自分が本当に求めていたもの、探していたものに気づかされたのではないかと思うのです。そのことが「息子の死は南無阿弥陀仏に遇うためでした」という言葉となったのです。

問題に遭わない方がいいことは言うまでもありませんが、お母さんを見てみると、確かに問題によって歩まされ、励まされている事実を思うのです。

それまで私は問題を解決して助かると思っていました。不安なら取り除かれて救われると思っていました。しかしそうではなく、問題こそが

私自身を目覚めます唯一の手がかりであることを思わされます。つまり問題があるがゆえにこの「私」を立ち止まらせ、揺り動かし、「お前の生き方はこれでいいのか」と問われるのです。そしてお母さんのように真実を求め、探す力となるのです。その歩みが、季節が来れば花が開くように、自然と真実の言葉に遇わせていただくのではないのでしょうか。

思えば私自身、コンプレックスから現実の自分がなかなか引き受けられず今日までできました。今もコンプレックスは消えることなくありますが、しかしそれが私自身なのです。その私だから多くの言葉や人との出遇いを頂戴ちやうだいしてきたように思います。これからもいろんなことに出遇って行くのですが、このお母さんのように問題を縁に道をたずねていきたいと思っています。